

冒険学校と現代教育を問う—教育哲学の地平から—

宮坂朋彦（みややん・自然文化誌研究会運営委員）

初対面の人から「仕事は何をしてるんですか」と聞かれたとき、私は大抵、二段構えで答えることになる。第一に、「まだ院生なんです。最近ちょっとずつ、大学で教員養成の仕事が始まりましたが...」と答える。そうすると「へえ、何の研究してるの」という第二の問いが出てくるわけだが、ここから先がややこしい。なぜなら、私の研究領域は「教育哲学」という、パッと聞いただけでは何をしているのかよくわからない学問だからだ。

すごそうとか、面白そうとか、難しそうとか、どちらかといえばポジティブに反応してもらうことが多いが、たまに失礼な人もいる。ここ最近で失礼ランキング圧倒的No.1を叩き出したのは、いきなり「これからはAIの時代だから、教育の研究なんて時代遅れじゃねえの?」と言ってきた、叔父の幼馴染だ。当然、そんなことはないと思っているから研究しているし、百歩譲って、こうした問いをぶつけることで話を引き出そうとしているとか、彼の中に教育とAIについて深い考えがあって問うてきているならわかるのだが—だとしても初対面だし言い方ってものがあるが—、そんな感じもなく、ただただ失礼なだけで対話になりそうになかったので、「そんなことはないですよ」と受け流した。

とはいえ、彼の発言は、「教育哲学」の現代的意義を示唆しているとともに、「教育学」の現代的課題をよく表している。教育哲学の一つの役割は、こうした問いに対して、「AIでは感じられない人のぬくもりが大事」のような感傷的で陳腐な解答に留まることなく、論理的に「そんな事はない、なぜなら…」と答えることなのである。

ところが近年の教育をめぐる議論は、「そんな事はない」と容易に言い切れないような状況に陥っている。心理学を中心に、教育をめぐるさまざまな要素を定量的に測定することを 目指すものが研究の主流を占め、現場は現場で、「エビデンス」の名の下に実践を正当化することで説明責任を果たそうとする動向が、こうした研究への需要を後押ししている。それは突き詰めれば、「教育はAIで補完できるのではないか」という問いに、必ずしも「そんな事はない」と言いきれないなんなら「その何が悪いんですか」とさえ言い出しそうな、そんな予感を孕んでいる。

教育哲学は、こうした議論の状況そのものを問い直すことを射程としている。その方法は、一言でいえば「当たり前を疑うこと」である。例えば「子ども」、「学校」、「性別」、「学力」など、教育を取り巻くさまざまな概念を用いて私たちは教育を語る。これらの概念は、必ずしも不変・普遍的なものではない。時代や地域、そして思想やイデオロギーと密接に関わっている。だが、日常的な教育をめぐる会話で、いちいちこれらの概念の思想性が問われる事はない。私たちは教育を語るなかで、なんらかの思想やイデオロギーを遂行している。問題は、それが気がつかないうちに意図せぬ方向へ向かって、取り返しがつかなくなっていはいしないか、ということだ。私の師の言葉を借りれば、**教育哲学の仕事は、「教育というものを見るときに、人が知らず知らずのうちに掛けてしまっている眼鏡をとり、点検すること」**によって、知らずのうちに教育という営みが奈落の底へと向かって落ちていくのを防ぐことなのである。

さて、自然文化誌研究会における実践も、もちろんそれが教育である以上、教育哲学的な考察の対象である。しかし、実際に冒険学校を運営するなかで、教育学的な何かを「疑う」という場面は、素朴には生じたとしても、それについて深く理論的に考察する機会は少ない。そこで、ナマステでの連載というこの機会に、教育哲学の地平から何が見えるか、私が関わったここ数年の自然文化誌研究会の実践(主に冒険学校)と絡めつつ、その眺望を少しでも示してみたい。

次号ではまず、「冒険学校」が「学校」という名を冠していることについて、考えてみたいと思う。

(次号に続く)